

北海道最強 SLED BROTHERS MT.BRO がレクチャーする、山で役立つコンテンツ!

[Useful contents for mountain sleders]

知識を増やして、山で安全快適に楽しもう!

山でSLEDを楽しむためにはあらゆる知識が必用です。マシンの事はもちろん、登山を楽しむ人達並に山の知識も必用ですし、なにより、山で実践的に必用な知識はとても大切です。今後、山の中で役に立つコンテンツをこのコーナー「宮浦BROがレクチャーする、山で役立つコンテンツ」で取り上げていきたいと思っています。



Lec.

1 山の中で SLED を楽しむ時の 服装や身につける装備

ウェアの好みはひとそれぞれなので別として、バックカントリーエリアに入るスレッダーなら、機能素材を使用したアウトドア系のウェアが好ましい。最近ではスノーモビルブランドでも機能素材を使用したウェアをリリースしている。基本はレイヤード(重着)。インナーに綿素材など汗を含むと乾きにくく体温を奪うものは着用しない。機能素材を使用した下着(ファーストレイヤー)を着用し、その上にフリースなどを着用(セカンドレイヤー)、一番上に防寒防滴性が強く浸透性のあるアウターを着用する。寒い時は予備のダウンジャケット(小さくバック出来るものが荷物にならなくて良い)などを中に着込む。寒い時は着る、暑くなったら脱げるといった重着をする様にしよう。



スノーモビルにはハンドルバッグやトンネルバッグなど、マシンにバッグを装備出来る。各箇所荷物を分けて山に入るのだが、ハンドルバッグには、テープ・スリングやカラビナ、ドライバーや六面レンチなど簡単工具、折りたたみ式のノコギリなどすぐに使いそうな備品を入れると良い。

Lec.

2 マシンに携帯/装備しておく 便利な物。また、その使用方法

スノーモビルで山に入るという事は、歩いて行くより装備は充実できるが、何から何まで持って行ける訳ではない。必用な荷物を最低限持って行くという姿勢は登山家と同じである。また、荷物によっては一緒に山に入るクルーで分けて持って行く事も可能だ。マシンに付けると便利、また、携帯して行くと便利な道具をレクチャーしよう。



スコップは、大は小を兼ねる。これは間違いなし。バックパック内に収納出来るスコップは収納性という点で勝るが、スノーモビルの場合、写真の様にくり付けていけるので、ひとすくいだけでだけ雪を出せるかを考えると大きいスコップを持って行く事をおススメする。



リアバンパーに適度な長さのテープ・スリングをキャタにかからない長さで付けておくと、スタックした時にバンパーを直接持って上げるより、格段に持ち上げやすいし、何本か付けておくと手助けしてくれる人が多い時に分散して持ち易い利点もある。



輪になったテープ・スリングをカラビナなどで人数分に分けてスキーハンドルに固定して引っ張ると効率が良い。もし、一人で引っ張る場合でも、スキーハンドルを直接引っ張るより力を入れ易い。



山の中でマシントラブルが起こり牽引しなくてはいけない場合、キャタに付ける簡易型のソリ。これを装着すると抵抗が無く牽引し易くなる。丸めるとコンパクトになるので、グループのひとりが持つて行くといざという時に安心だ。



Lec.

3

スタックした時の脱出方法 基本編

上手い人は別として、初心者から中級者の場合、山に入った一日の半分はスタックしたマシンを出している?!と言っても過言では無いと思う。そのくらい労力を使うし、帰ってからの疲労の原因になる。出来る限り素早くスタックしたマシンを出すにはどうしたら良いか? 闇雲に掘ればよいのではなく、脱出するのに必要な部分をしっかり掘る事が重要。焦ると体力を消耗するだけである。仲間がいる時はお互い様なので、すぐに助けを呼ぶ事も大事。みんなで行動しているのだから、ひとりが埋まれば行程時間に影響するし、帰宅予定時間が送れる事は、二次災害が起こる原因にもなる。自分が埋まった時はすぐに声をかけるが、人が埋まったらすぐに助けに行く! この姿勢が大事だ。



さて、この場合



SQ.1



基本はスコップで掘るべし!

まず、キャタのリア部分が見えるまで掘りながら、同時に踏みながら、雪を固める。次にマシンの前部(腹下)も掘り、雪を固める! 腹下だけでなく、スキーの下も掘ると、傾いたモービルが水平に近くなり、脱出しやすくなる。このときにリアを持ち上げ横にずらせば更によし。

SQ.2



続いて、モービルの両サイドを後部からスキーのテールが見えるまで掘る! できれば掘るばかりでなく、足で踏みながら雪を締め固めたほうがよい! (バックし易くするため)



SQ.3



両サイドは、特にステップの下の雪をきれいに取り除く。ステップの下に雪があるとどんなに頑張っても脱出出来ない。サイドから覗いて、キャタの底部が見えればOK!

SQ.4



ここまで出来れば、男性であれば後部を持ち上げ、横か後ろにずらす事が可能なはず(たぶんね)! 腰の弱い方は無理せず、仲間に手伝ってもらおう!(出来るだけSQ.1~SQ.3までは一人でいい、仲間の手助けはSQ.4からにすると、迷惑のかけ具合が違う。頑張ってみよう!)



SQ.5



ここまで出来れば、最近のマシンはリバースが装備されているので、リバース出来ればアクセルワークに注意して(注意しないとまたキャタで掘ってしまい、最初に後戻り)、最初は50cmくらいから前後進させ、足場を固めていく!



SQ.6



徐々に前後進の幅を広げ、2~3mくらい助走距離が出来れば、一気に脱出! ここまでのどれかを手を抜くと、またスタックしてしまいSQ.1からのやり直しになってしまう...。出来る限りしっかりSQ.1からSQ.5までの行程をやりましょう。



TIPS

仲間がいる場合、又は、バックしづらい状況などの時は、仲間にスキーの先端を引っ張ってもらいと脱出し易い。この時にP79で取り上げた様に、テープ・スリングとカラビナを使うと良い。引っ張ってもらうときはお互いのタイミングを合わせ、あまりエンジンの回転数を上げずに少しづつ前進させよう。ここでもアクセルワークが大事。最近では、脱出アイテムとして簡易的なハイジャッカーと呼ばれるジャッキもある。しかし、基本はスコップで掘り、足で踏み固める事が一番!! 出来るだけ大きいスコップが良い理由が分かるでしょ?

